



黄皙暎 ファンソギョン

武器の影 [上]

高崎宗司・佐藤久・林裔一訳

岩波書店

黄晷暎

武器の影 [上]

高崎宗司・佐藤久・林喬一 訳



岩波書店

武器の影 (上)

一九八九年三月二日 第一刷発行 ©

定価二二〇〇円

訳者

高崎 宗司
佐藤 久
林 藤

発行者 緑川 亨

発行所 株式会社 岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五

電話 〇三三六五四二二
振替 東京六三六二四〇

印刷・精興社 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-002008-0

作者の言葉

この小説は、ベトナム戦争が終わった後の一九七五年から「乱場」という題で連載された。いったん中断した後、一九八〇年代の初めに改めて『月刊朝鮮』に連載されたが、再び中断を余儀なくされたものである。

私は、ベトナム戦争に海兵隊員として従軍したが、当時の韓国の参戦に対する認識は「自由の十字軍」であった。また、一九七〇年代には「ベトナム滅亡」という表現があたりまえのように使われていた。しかし、一九八〇年「光州抗争」以降、韓半島にとってのアメリカの意味が改めて問い直されるようになってからは、「民族解放」のもう一つの準拠として論議されるようにもなった。一九世紀以来、西欧帝国主義の鎖から解放され、独立と社会変革を闘い取ろうという第三世界の諸民族の解放闘争は、様相と傾向を変化させながらも進行してきたし、今も進行している。一九八〇年代に入って、韓国近・現代史研究の新しい流れが形成されつつあることは、帝国主義と民族主義、あるいは分断と民族統一の葛藤から主体的に抜け出そうという実践的な意志の現れだと考えられる。

したがって、中国や日本の近・現代史が我々にいろいろな新しい視角を与えてくれるように、

いや、ある意味では、我々と同じ道を歩んできながら、現在の我々とは異なった方法と在り様で自らの民族問題を解決したベトナムのほうが、我々により多くの新しい視角を与えてくれると信じた。

一九七〇年代初めのこうした執筆の動機に、その後も変わりはない。実にこの小説は、十年の間に三回も始め直さなければならぬという数奇な運命を辿った。もちろん、私の怠慢にも問題があっただろうが、自分たちの問題さえ満足に解決できないのに外国に対して加害者になってしまった、という事情もあったのである。それは、客観的に取り扱えないという基本的な制約となつた。もちろん、その制約は今もきわめて確実に、かつ強く存在している。しかし今は、ある程度、私も心理的な安定を取り戻したと言えるだろうか。

私がこの小説を思い通りに書き終えることができたのは、一つの社会的進展に負うものだと言えよう。したがって、こうした客観的な表現の場は、我が国の分断の問題と現代史の領域にまで広げられなければならないのである。ともあれ、「十字軍」であれ、「ベトナム滅亡」であれ、ベトナム戦争が抽象的なヒューマニズムや特派員的な視角から取り扱うということは、私が十年前に書いたように、苦しんでいる者の立場からあまりにもかけ離れているものである。

これまでアメリカで出たすべての小説や映画は、アジア人の立場から見ると、屈辱的であり、あまりにもアメリカ人は厚かましいと思われる。鹿狩りに行って鹿の澄んだ目とぶつかると、引

き鉄を引けなくなり一種熱病にかかったようになるというが、これは人間が本来もっている生命に対する畏敬のためである。何年か前のハリウッド映画は、このモチーフをもって、結局は加害者である自分たちが受けた靈魂の傷に苦しみ泣くまねをした。そして、戦場の非人間化現象の責任を、ロシアン・ルーレットを捕虜たちに強要したようにベトナムのゲリラに転嫁する。これを見ると、膨大な砲弾を他国に浴びせた加害者が靈魂とヒューマニティは白人だけのものであるという虚偽意識を撒き散らしているのがわかる。ハリウッドは最近、根は同じであるが枝だけは違う二つの虚偽意識を作り出した。一つは、ベトナム戦争の道徳的な正当性を獲得できなかった者の殺戮と憎悪を感傷的な帰還兵の孤独と適当にかき混ぜたひどい娯楽物であり、もう一つは、「真実」を明らかにするといいながら、アメリカ社会内部で今後剔抉（てつげつ）していかなければならない問題の焦点を曖昧にしてしまうものである。

ベトナム戦争が続いていた当時の言論は「ミライ虐殺」を広く報道し、裁判は開かれたものの、ベトナムやラテン・アメリカの民族問題に関する基本的な政策は変わらず、注意も向けられなかった。しかし、ハリウッドの映画を見慣れてしまったアジア人は白人の苦悩を自己の苦悩と同一視する。主人公は自分である。わずかの金を貰ってベトナム人として登場したアジア人の端役が自分であることに気がつかないのである。そして、「アメリカ人は彼らの敵を自分の鏡に映った姿に変貌させることで、ベトナム人が闘い取った歴史の本質を曖昧にしてしまう」（フランシス・

フィッツジェラルド」という指摘のように、アメリカが本質的な問題を避けているのに、「ミライ事件」の公開という程度の「真実」を自ら明らかにすれば、その影響下にある国の知識人たちは、アメリカにおける言論の自由やアメリカ人の寛大さと勇氣に賛嘆するばかりである。

私がこの小説を書いたのは、まさにこの一面的な虚偽意識から抜け出し、自身の問題を直視するためである。

一九八七年九月（一九八八年一〇月加筆）

主な登場人物

安栄奎 韓米合同捜査隊韓国軍派遣隊の市場

調査要員。

大尉 韓国軍派遣隊長。

軍曹 班長。安栄奎の直属の上官。

クラペンスキー アメリカ海兵隊少佐。合同

捜査隊の責任者。

ルーカス 米軍軍曹。

トウリンおじさん ダナン幼年学校の前校長。

ファム・ミン フェ大学医学部予科学生。

チャン・ティ・ソアン ファム・ミンの恋人。

レイ ファム・ミンの妹。

ミー ファム・ミンとファム・クエンの姉。

ファム・クエン ベトナム政府軍少佐。ファ

ム・ミンの兄。クアンナム省長ラム中將の

副官室長。

ミミー(あるいは呉恵貞) ダナンに住む韓国

人女性。

マダム・リン スポーツクラブの中国系女主

人。

グエン・クオン レロイ旧市場の省庁取引者。

グエン・タット クオンの弟。

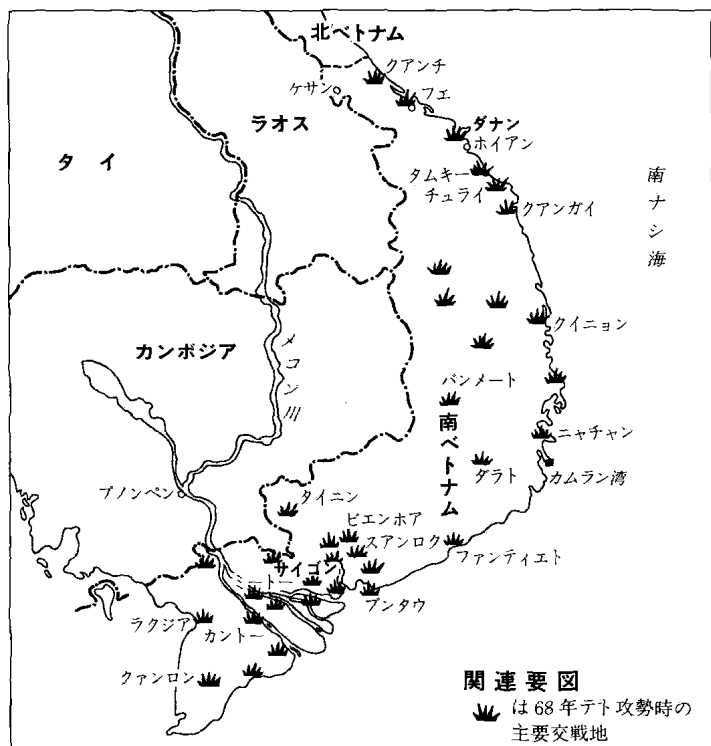
トウラン博士 ダナン赤十字病院長。

ヒエン老人 フォン商会の代表。

ステフリー トウレン補給廠の首席補給兵。

レオン トウレン補給廠の補給兵。

キエム中尉 ファム少佐の副官。



〈関連年表〉

- | | |
|------------------------------------|--|
| 1945.8 ベトナム独立同盟(ベトミン)蜂起。 | 1963.11 南ベトナムでクーデタ(ジェム政権倒れる)。 |
| 1945.9 ホー・チ・ミン主席、ベトナム民主共和国独立宣言。 | 1964.8 米艦、北ベトナム哨戒艦と交戦(トンキン湾事件)。米、報復として北爆開始。 |
| 1946.6 フランス、南部に「コーチシナ自治共和国」樹立。 | 1965.9-10 韓国、猛虎・白馬師団、青龍旅団を南ベトナムに送る。常時4万人、73年の撤兵までにのべ40万人が参戦。 |
| 1946.12 第一次インドシナ戦争始まる。 | 1968.1 解放戦線のテト攻勢。 |
| 1954.5 北部のフランス軍基地ディエンビエンフー陥落。 | 1968.3 米軍によるソンミ虐殺事件発生。 |
| 1954.7 ジュネーブ協定調印。以後フランスが退き、米国が前面に。 | 1969.1 第一回パリ和平会談。 |
| 1955.10 南ベトナムにゴ・ディン・ジェム政権樹立。 | 1973.1 米・南ベトナム・北ベトナム・臨時革命政府間で和平協定調印。 |
| 1960.12 南ベトナム民族解放戦線結成。 | 1975.4 サイゴン陥落。 |
| 1962.2 米、南ベトナム援助軍司令部(MACV)設置。 | |

武器の影
(上)

1

一〇五ミリ砲が絶え間なく対岸を撃ちつけていた。しかし音がけたたましいばかりで、人気がない砂原と鉄条網とサボテンの茂みの上には、真白な陽射しが照りつけているだけだった。水の上に浮かんだ小舟のように、ジャングルの一部がまばらに残っていた。その間を、両側を鉄条網と低い砂袋の壁に遮られた狭苦しい軍用道路が、各中隊と大隊とを結んでいた。道路の交通統制所に設置された高い望楼から、ときおりジャングルに向かって威嚇射撃を浴びせる音が聞こえてきた。

丘の向こうで砂煙が起こった。もくもくと上がった埃は丘をなめて下り、道に沿って回転しながら、砂原の上で舞った。補給物資輸送車輛は、とうに通過した時刻だった。ジープが向きを変えて、砂袋の壁の狭い通路に入ってきた。土埃のせいで、車の後方の砂原がいつとき見えなくなった。防壁の前で警戒していた、中隊の歩哨が叫んだ。

「車輛がやってきます」

「どここの車だ？」

「旅団本部の車輛のようです」

歩哨と分隊長のやりとりを聞きつけた兵士の間に、ざわめきが起こった。壕の中に座りこんで銃器の手入れをしていた兵士らが、立ち上がって防壁から身を乗り出し、前方を眺めた。

「旅団本部だな。誰かを連れにきたんだろう」

「連絡兵かな……」

「新兵は来たんだし……間違いない、誰か抜けてくんのだ」

車は中隊の防禦陣地の中まで入らずに、鉄条網の前で急停車し、歩哨がバリケードを横に押しつけた。埃が収まると、車上の人物が見えた。戦闘服姿ではなかった。民間人の着る黒いジャケットに、つばの広いビルマ型特殊部隊のジャングル帽をかぶっていた。運転手も同じ服装だった。ジープの後部座席には機関銃座があり、弾倉を外した機関銃がななめにぶら下がつて揺れていた。

「何ですか？」

バンカーから出た中隊長が、階級章もなく軍服も着ていない彼らに尋ねた。二人は濃いサンングラスを外さなかった。敬礼もしないまま、一人が書類を手渡して言った。

「CID〔軍犯罪捜査局〕だ。転入者を引き取りにきた」

中隊長が書類にさっと目を通した。兵士たちはみな手を止めて、黙ったまま中隊長を見やった。

「上等兵安栄奎……安上等兵！」

名前を呼ばれた兵士が、壕の中からおずおずと立ち上がった。彼は、ヘルメットの跡でこぼこした頭をまごつかせながら、中隊長のところまで歩いてきた。彼は、ヘルメットだけは脱いでいたが、模範的な単独武装をしていた。乾季の歩兵たちがそうであるように、安上等兵もジャングル服のズボンをつめて、軍靴の上に膝をさらけ出していた。繕っていない布の糸がほどけて、房のように垂れ下がっていた。中隊長が書類をしきりに揺すりながら言った。

「困ったなあ、こりゃあ……古参ばかり引っこ抜かれたら、戦闘はいたい誰がやるんだ。見張りに立てるような奴も今はいないってのに」

中隊長は、ジープの上の人物が人事参謀でもあるかのように訴えた。男はビルマ型ジャングル帽をとって、胸をパタパタ扇ぎながら言った。

「死線を越えれば誰だって古参兵になりますよ」

「戦闘経験が問題なんです。六か月以上の者はいくらもいません。その後だって、八か月まで作戦に出すわけにはいかないし、新兵は足手まといなだけです。三か月たって、ようやく格好がつくんです。でなければ……その前にヘリコプターに積まれて……」

中隊長は書類を先任下士官に渡し、力なく周囲の兵士たちを見回した。ジープが中隊の外のほうに向きを変えた。まだ中隊長の前で、ぼうっとしたまま突っ立っている兵士に向かって、ジープの上の黒いパジャマが言った。

「おい、早く乗れ！」

「申告しなければなりません。荷物もありますし」

「申告？ 何言ってるんだ……命令が出たんだぞ。そんなもの関係ない。何も要らん、さっさと乗れ」

兵士が中隊長に目をやった。中隊長は、すでによその家族になっている彼を冷やかに見つめた。

「じゃあな」

彼が敬礼したとき、中隊長はもうバンカーのほうに背を向けていた。先任下士官がうなずいてくれた。小隊長が、兵士たちの隙間から手を差し出した。

「元気でな。御苦労だった」

安上等兵は、彼と握手をしてジープに乗った。彼が六か月の間閉じこめられ喘いできた、この小さな窪みの中に目をやるいとまもなく、車が走り出した。砂袋越しに眺めていた兵士たちの頭が、埃の間にぼんやりと残っていたが、すぐに消えてしまった。中隊の防禦地域を抜けると、車はさらにスピードをあげた。安上等兵は、ぐらぐら揺れる機関銃の銃身が頭にぶつからないよう

に片手で攔んで座っていた。彼は上半身をかがめて、助手席の背もたれに向かって尋ねた。

「旅団本部に行くよう命令が出たんですか？」

男はふりむきもしないで、うるさそうに言いかえした。

「とにかく……おまえはついてるぞ」

運転手が安栄奎に尋ねた。

「何か月這い回ってたんだけ？」

「今日で、五か月と十四日です」

「偵察に出ていたようだな」

下士官らしいパジャマの言葉に、運転兵のようなパジャマが笑った。

「偵察どころの話じゃないでしょうが。ホイアン市内が根こそぎ占領されたってのに」

「攻勢だな」

安栄奎が口を挟んだ。

「午後から反撃が始まります」

「ホイアン市内に入るのか。あそこはチュライとは違うぞ。正規軍だ」

チュライから旅団本部が移ってきて一か月が過ぎていた。安栄奎は、後発隊に加わってホイアンの周囲に二度待伏せに出向き、一度は中隊規模の作戦を経験したのだった。彼も、今日の市街

戦では死傷者がたくさん出ると予想していた。歩兵たる者は、戦闘を前にして作戦の話をあれこれしてはならない。できるだけ口を閉ざして、昨夜見た夢なんかはおさら胸に秘めて、自分の装備でも点検していればよいのだった。彼は、自分がどこに行こうと関心がなかった。ジープがハンドルをきるたびに、榮奎は腹這いになったり、銃座に抱きついたりするのに忙しかった。彼は、車が停まればまず水筒を満たさなければならぬことだけは、はっきりと理解していた。クローカルキの臭いがしない炊事部の井戸水なら、幸運というべきだ。安榮奎上等兵は、陽に焼けた顔に切れ長の目が鋭かった。唇は白くひからび、頬がこけていた。髪は伸ばしほうだい、首筋までかかっていて、栗のいがのような髭が頑丈な顎の下にまばらにはえていた。彼の小さな褐色の体が弛んでいるときさえ、目は休むことなく周囲を見回しているのだった。何物にも感動せず、苦痛や憤怒さえ表に出すことはない。感情が陽に真黒く焼けこげてしまったのだ。殺戮と渇きと暑さが、すべての戦闘員をほんの十五日間でするように押しつぶし、叩きのめして、焼けた空き缶のようにしてしまふのだった。

車が速度を落とした。旅団本部のある地域にさしかかっていた。憲兵哨所をすぎると、ベニヤ板とトタンでできたキャンプの建物が現れ、後ろに二重の鉄条網が巡らされた囲いや、梯子のなかった望楼が見えた。望楼の上で監視兵が機関銃を地面に向けたまま、缶詰のレイションを開けて食べていた。捕虜収容所だった。鉄条網の中では、暑さに耐えかねてぐったりした十余名の捕